

聖書日課 『からし種』 2024.3.24-3.31

<p>3月24日 (日)</p> <p>詩編 126編</p>	<p>「涙と共に種を蒔く人は／喜びの歌と共に刈り入れる」(5節)。「種を蒔く人の涙」はどのような涙なのだろう。飢饉の時に種もみを取り分けることは、口に入れる麦を減らすことであり、大変な葛藤と犠牲が伴うという。それでも「神が導かれる救い」に信頼し「種を蒔く」ことは「希望」の働きなのだ。今日、世界中でささげられている「涙と共に種を蒔く働き」を覚えて。</p>
<p>25日 (月)</p> <p>詩編 127編</p>	<p>「主御自身が建ててくださるのでなければ／家を建てる人の労苦はむなし。主御自身が守ってくださるのでなければ／町を守る人が目覚めているのもむなし」(1節)。主イエスは常に「アッバ、父よ」と親しく神を呼び、「御心」を求め続けた。賜物と力にあふれながらも「御心」を確かめないと動かなかった。まして、私たちはなおさら「御心」を求める者でありたい。</p>
<p>26日 (火)</p> <p>詩編 128編</p>	<p>「いかに幸いなことか／主を畏れ、主の道に歩む人よ」(1節)。私たちは多くの場合、自分の願い通りに事が運ぶと「ラッキー」と言い、多くの富を持ち、好きなことを自由にできる人を見ると「幸いだ」と思う。今日、聖書が語る「真の幸い」をどれだけ真剣に求めているだろうか。その心の中に常に主なる神への「畏れ」をもち、十字架の道を歩まれた方を覚えたい。</p>
<p>27日 (水)</p> <p>詩編 129編</p>	<p>「主は正しい。主に逆らう者の束縛を断ち切ってください。シオンを憎む者よ、皆恥を受けて退け」(4-5節)。シオンは都エルサレムの別称である。シオンを絶対的聖地と見て賛美する思想を「シオニズム」といい、ガザ侵攻を支持する根拠となっている。しかし「正しい」のは「主」であって「シオン」では決してない。「主の正しさ」が体現された十字架を見上げたい。</p>

メール配信登録メール senforn.obc@gmail.com

大井バプテスト教会

メール配信希望の方は名前とアドレスを明記の上、上記のアドレスまで

聖書日課 『からし種』 2024.3.24-3.31

<p>28日 (木)</p> <p>詩編 130編</p>	<p>「主よ、あなたが罪をすべて心に留められるなら／主よ、誰が耐ええましょう。しかし、赦しはあなたのもとにあり、人はあなたを畏れ敬うのです」(3-4節)。旧約には神の正しさに自分を重ねて「選ばれし自分を誇る信仰」と、神の前に罪を重ねてきた「自らの罪を悔い改め告白する信仰」と、二つの流れがある。十字架の主につながるのはもちろん後者である。</p>
<p>29日 (金)</p> <p>詩編 131編</p>	<p>「わたしは魂を沈黙させます。わたしの魂を、幼子のように／母の胸にいる幼子のようにします」(2節)。十字架の主の前で私たちに何ができるのだろうか。沈黙する他ないのはいか。母の胸にいる幼子は、そこを離れては生きていけないことを本能的に知っている。十字架の主を離れてはいけないことを、わたしはどこまで深く知っているだろうか。</p>
<p>30日 (土)</p> <p>詩編 132編</p>	<p>「あなたに仕える祭司らは正義を衣としてまとい／あなたの慈しみに生きる人々は／喜びの叫びをあげるでしょう」(9節)。「正義を衣としてまとい」という言葉には注意が必要である。人間がそれをする、たいてい間違ふ。「正義を衣としてまとい祭司」は十字架の主のみ。十字架の死に至るまで神の前に従順に歩み通されたキリストのみである(フィリピ 2:8)。</p>
<p>31日 (日)</p> <p>詩編 133編</p>	<p>「見よ、兄弟が共に座っている。なんという恵み、なんという喜び」(1節)。主の復活の朝、弟子たちは失望と恐れにさいなまれながらも、ひとつの部屋に集まっていた。「互いに愛し合いなさい」という主の教えを忘れなかったからだろうか。早朝、主の墓に出かけた仲間の女性たちが、驚くべき喜びの知らせをもって飛んで帰って来る時も近い。</p>